

## 4節 教育プログラムⅢ

(シェアリング：相談施設を見学した生徒による発表)

### 1項 はじめに

施設見学は、生徒が専門相談機関の実際を学ぶ、非常に貴重な機会です。しかし、全生徒の見学を受け入れられるだけの規模の施設や、複数の見学施設を確保することは困難です。このため、見学に行った生徒たちからの発表を通じて、生徒全員が学びを共有する時間を設けています。

### 2項 目的

見学内容や見学体験の共有。

### 3項 内容の要約

本プログラムでは、施設内の様子、質疑応答の内容、利用者の話など、見学先の機関がどのような場所だったのかを、見学した生徒に発表してもらいます。その発表から、ほかの生徒にも施設見学の様子をリアルに感じてもらうことをねらいます。必要に応じて施設の案内や写真を活用すると、視覚的な情報により具体的なイメージが想起されるでしょう。ホームページの画像なども、施設に了承を得たうえで活用できるとよいです。

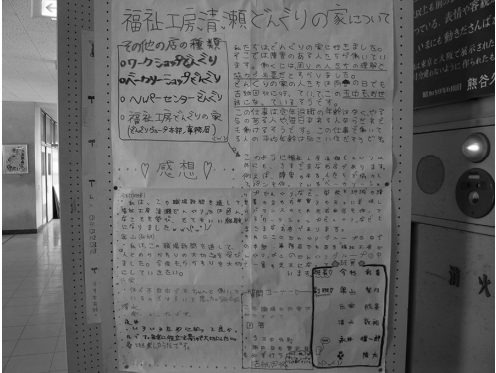
本教育プログラムの構成要素は、体験内容の共有です。スライド例3は構成内容・写真・説明内容の概略です。

### 4項 授業内容（スライド例3）

見学した生徒らが事前に準備した資料を用いて発表します。見学の様子をスライドで映写しながら（または模造紙で）、体験を共有（シェアリング）しました。スライド例3にその様子を紹介します。

## スライド例3 教育プログラムⅢ（一部抜粋）

授業時間：約50分（別途、発表内容の準備時間が必要）

構成内容	実施時の写真	説明内容
取材ノートをもとに体験内容の振り返り		見学した生徒は、見学を体験していない生徒に情報発信ができるよう、見学内容を振り返りながら資料を作成する。資料は見学から得た学びや発見、感想が記された「取材ノート」をもととする。発表資料は模造紙などに作成した。発表は、スライドを映写しながら、生徒が見学を通じて得た体験を自分の言葉で語り、ほかの生徒と体験の共有（シェアリング）を行う。

## 5項 授業の工夫

講師役は、見学した生徒の発表内容へのポジティブなフィードバックを行うとともに、たとえば、見学当日の生徒の様子、利用者や施設担当者方の反応といった、スタッフの目線からのエピソードや、スタッフ自身が感じたことなどをコメントするなど、見学に参加できなかった生徒が体験を共有しやすいようにシェアリングを盛り上げます。

見学で撮影した写真は、見学施設先の利用者の個人情報保護の観点から、シェアリングの目的以外には使用しないことを生徒にあらかじめ確認しておきます。

## 6項 授業に際して必要なツール

- ・取材ノート、写真やビデオ撮影をした場合は画像や映像データ。
- ・パソコンなどの画像や映像の再生機器、プロジェクターなどの視聴覚機材。
- ・発表準備に必要な文房具（模造紙、カラーペンなど）。

## 7項 事前・事後に必要なこと

## 1) 事前

目的に即したシェアリングを行うには、スタッフが発表の準備を手伝う必要があります。しかし、学校教育の一環として、生徒の自主性が重視されるので、スタッフの介入には限界があります。そのため、スタッフは担任の先生と相談しながら、臨機応変に生徒の発表を支えなければなりません。また、シェアリング専用の発表時間が設けられることが望ましいのですが、用意された授業時間の主目的が「職場体験」の場合はほかの生徒の発

表との兼ね合いで、発表時間が10分程度に制限されることもあります。そのため、限られた時間の中で、いかに要点を絞った発表を行うのかもシェアリングの成否にかかわります。スライド（パワーポイント）による発表が行えるようであれば、より効果的にシェアリングを進めることができるでしょう。

## 2) 事後

本プログラムで生徒が発表した内容を、見学施設先にも報告し、生徒の学びを共有できると、施設側にとっても今後の見学受け入れや、活動展開の動機づけにつながるでしょう。

なお、シェアリング後の写真データの扱いについては、学校と相談し、撮影を許可した施設や利用者にとって不利益とならないような配慮はもちろんのこと、撮影した生徒自身が思わぬ批判にさらされないように、SNSなどに載せないなど教員やスタッフが生徒に説明し、かつデータは教員やスタッフが管理することが望まれます。

# 5節 教育プログラムⅣ（当事者との交流プログラムとまとめ）

## 1項 はじめに

本プログラムは、1年次プログラム全体のまとめとして、こころの病気やこころの問題を抱える当事者の体験談を聞く時間としています。こころの病気は誰もがなりうる病気であり、特殊な病気ではないこと、治療や相談が助けになることなどを、当事者の実体験を通じて学んでいきます。

こころの病気やこころの問題に対する偏見やネガティブなイメージは、自分が実際に精神的不調を生じた際の援助希求行動を阻害する大きな要因の1つです。生徒は、これまで授業で学んできた内容と当事者の体験談を重ね合わせることにより、こころの病気や、医療機関、相談機関の果たす役割について理解を深める機会となるでしょう。

## 2項 目的

当事者との交流を通して、こころの病気や精神障がいをもつ人への偏見や差別を払拭します。また、1年次プログラムのまとめとして、“悩み”を肯定的な存在として意味づけます。